

長原遺跡(NG02-8次)発掘調査現地説明会資料

2003年5月11日(日)

大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会

大阪市平野区長吉長原・出戸・川辺・六反一帯に広がる長原遺跡は、後期旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡です(図2)。大阪市教育委員会と(財)大阪市文化財協会は、2002年12月から現在まで、遺跡の東部に当る長吉長原東1丁目で発掘調査を行ってきました。今回の発掘調査では、弥生時代中期(約2100年前)から古墳時代中期(約1600年前)にかけての多くの遺構・遺物が見つかり(図1)、当地域の歴史変遷を解明する上で重要な考古資料が得られました。

調査地の場所は、南からのびてきた台地の端から沖積平野へ下がったところにあたり、弥生時代には縄文時代晩期ごろに土砂がたまってできた微高地が広がっていました。周辺の調査では、弥生時代中期から古墳時代中期までの住居・墓などが多く見つかり(図3)。この微高地は弥生時代から古墳時代中期にかけての間、生活域として格好の場所となっていたようです。今回の調査でもこれらの時期の住居・墓などが見つかり、以下では代表的な成果について紹介します。

1. 周溝墓・古墳の発見

北側の調査区では、弥生時代終末～古墳時代初頭(3世紀後半～4世紀初頭)の方形周溝墓および円形周溝墓が5基見つかりました。このうち方形周溝墓1が最も規模が大きく、一辺約12mあります。また、方形周溝墓2と円形周溝墓5は、周溝の一個所がとぎれた陸橋部があります。それぞれの墓の周溝からは埋葬の際の祭祀に用いられた土器が出土しており、特に方形周溝墓1からは底部に孔をあけた二重口縁壺が数点出土しています。また、周辺には周溝やマウンドをもたない墓もあり、中からはガラス玉が出土しました。

南側の調査区では、古墳時代前期末(4世紀後半)の方墳が1基見つかりました。墳丘の規模は一辺が約12mで、墳丘上と周溝内からは土師器とともに、複数の家形埴輪が出土しました。また墳丘の中心には、長さ約3.6m、幅0.7mの割竹形木棺を粘土でくるんだ「粘土槨」と呼ばれる埋葬施設がありました(参考資料-図6)。木棺内の北東側からは被葬者のものとみられる歯が数本と、頭髪につけていたと思われる埴輪3点が出土し、木棺の外側(北西側)に

は鉄製の刀一振りが副葬されていました。長原遺跡ではこれまで200基以上の古墳が見つかりますが、今回発見された古墳はこれらの中でも初現期のもので、粘土槨という埋葬施設も本遺跡では初めての発見です(図4・5)。ちなみにこの古墳は、213番目の発見となったことから、長原213号墳と命名しました。

以上の発見は、弥生時代以来の伝統的な周溝墓から、粘土槨や埴輪をそなえた古墳へという墓制の変化を、一地域内で具体的に知ることができる点で重要です。

2. 古墳時代中期の生活のあと

古墳時代中期(5世紀前葉)になると、調査地域は墓域から居住域に変化し、建物とこれを取り囲む「コ」の字形の区画溝、井戸、焼土や炭をすてた穴、火を焚いた浅い穴、大量の土器を棄てた跡などが見つかりました。また、最古式の須恵器や軟質の韓式系土器が多数出土しており、朝鮮半島南部の伽耶や百済の地で出土する土器と類似するものも多く見られます。このことから、このムラには、朝鮮半島南部から移住してきた人々も生活していたことが推測されます。

さらに注目される遺物として、鉄など金属をつくる際に使用されるファイゴの羽口(土製)が出土しました。火を焚いたり焼土や炭を棄てた穴が多くみられることから、調査地内もしくは近くで、鉄器生産を行っていた可能性ができました。

5世紀には、朝鮮半島南部から多くの新しい文化・技術が近畿地方にもたらされましたが、これはその最初期の技術導入によるものと思われます。またこの時期には、直前の時期の古墳を破壊して区画溝がつくられており、ここにムラを営んだ人々と古墳をつくった人々との関係を推測する上でも興味深い資料となります。

3. その他

調査は現在も進行中であり、今後も新たな成果が予想されます。現時点で判明したその他の成果について簡単に触れておきます。

南側の調査区では、高床構造の総柱建物を含む掘立柱建物群が見つかりました。時期は弥生時代後期(1世紀)もしくは古墳時代中期だと考えられます。また、南側調査区の西半では、弥生時代後期の溝などが見つかりました。

弥生時代中期後葉(紀元前1世紀)の溝や竪穴住居も見つかりましたが、本格的な調査はこれからです。

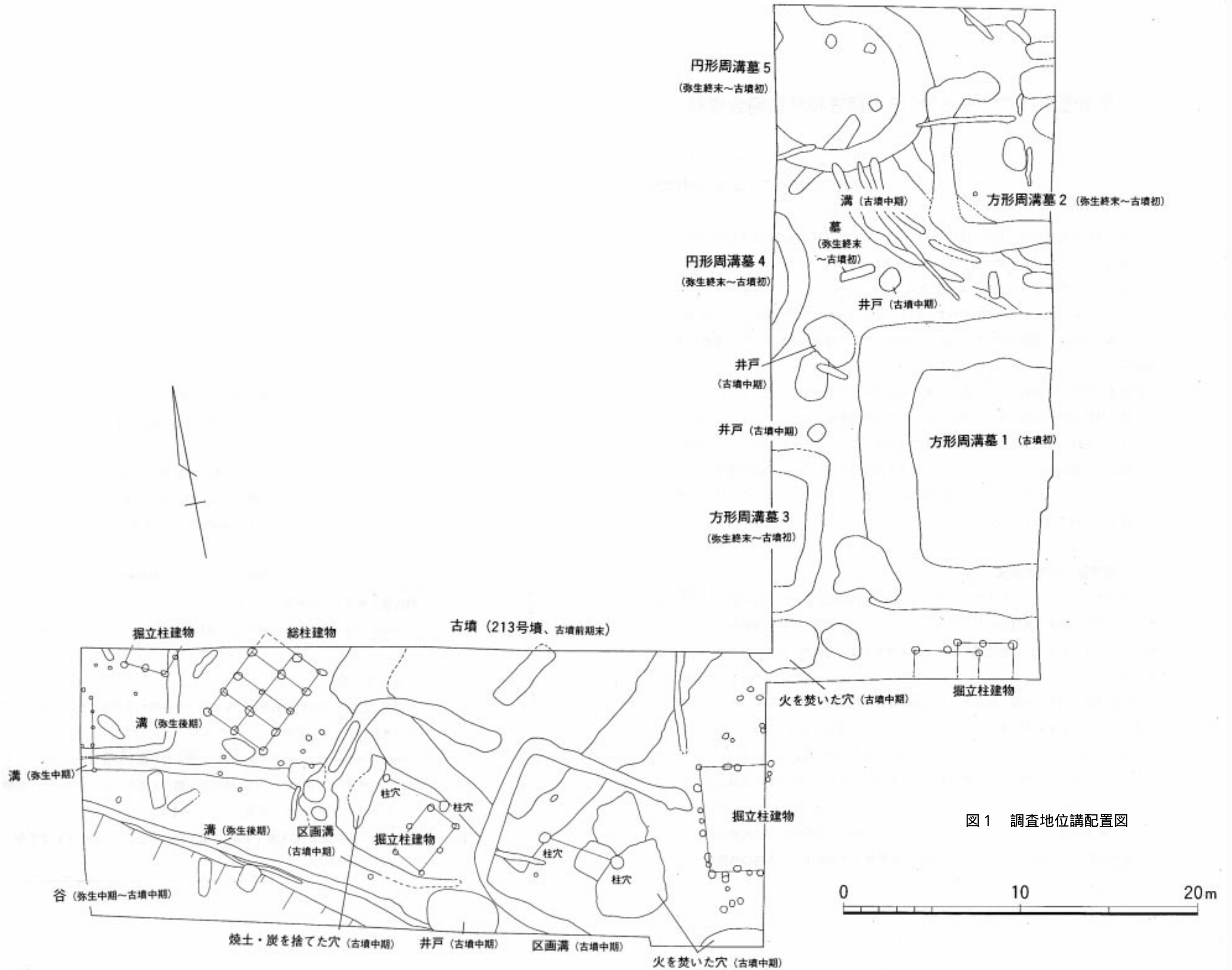


図1 調査地位講配置図

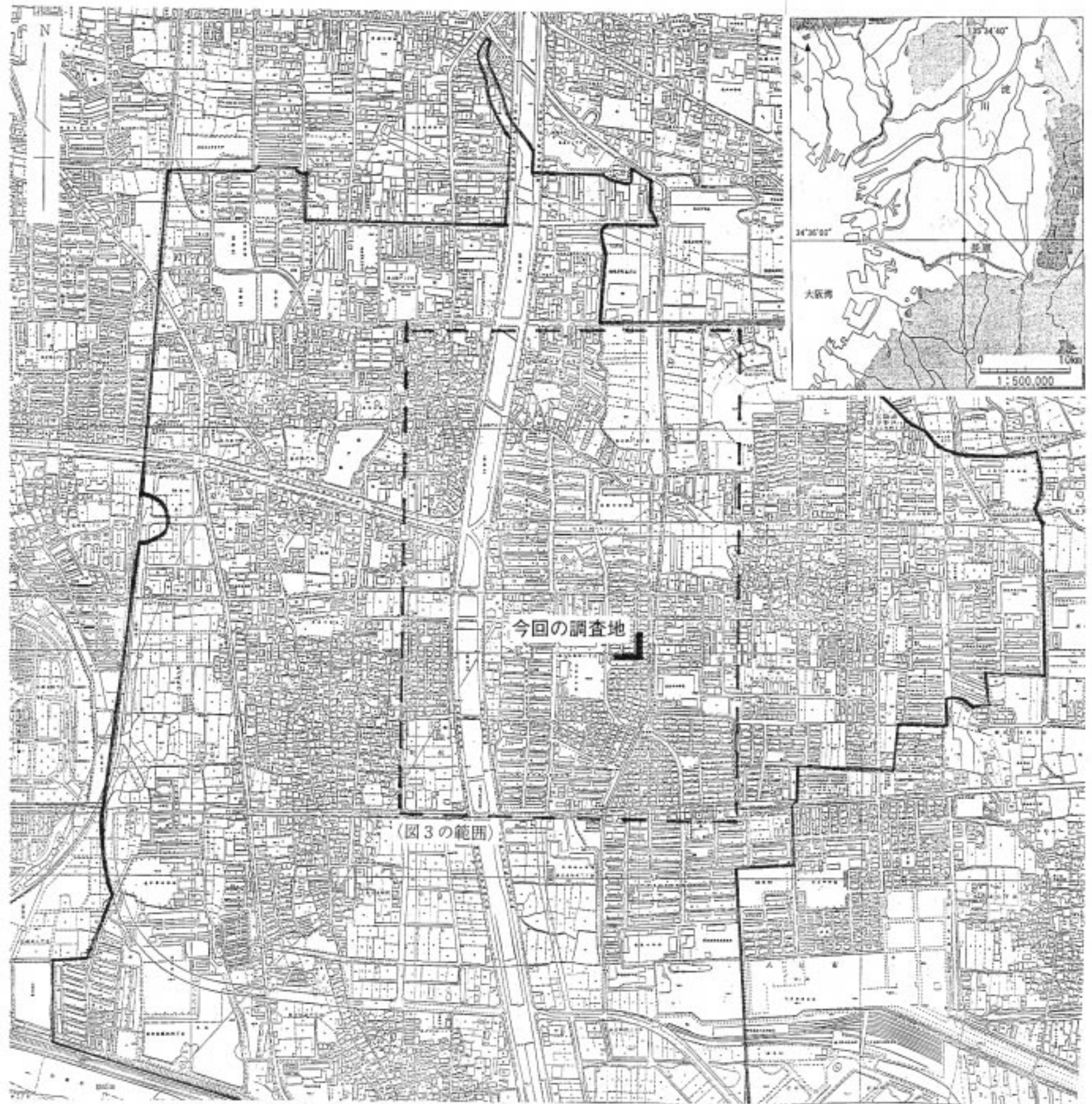
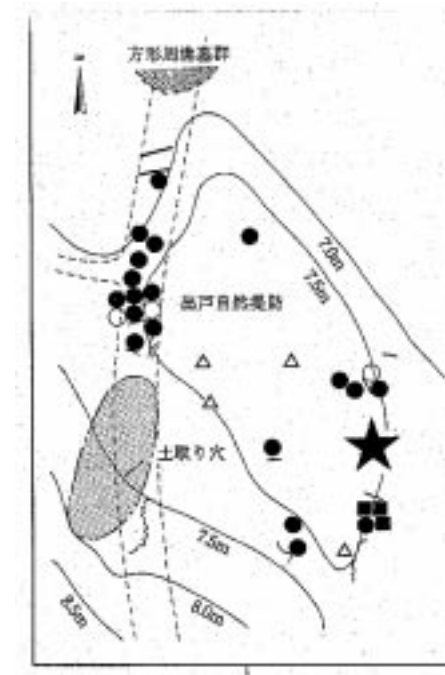
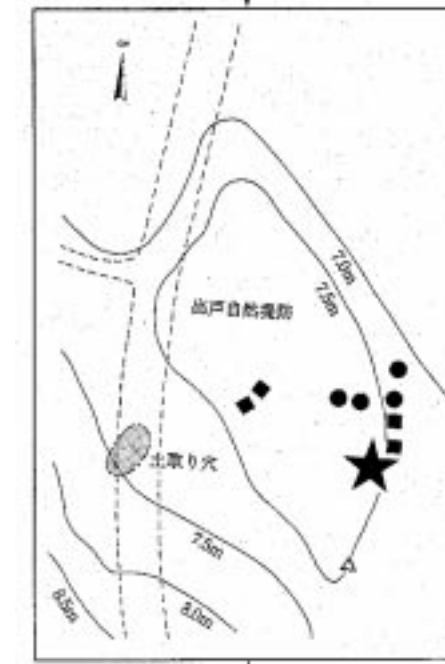


図2 長原遺跡と今回の調査地の位置



[様式後半 ~ 庄内期]



[5世紀]

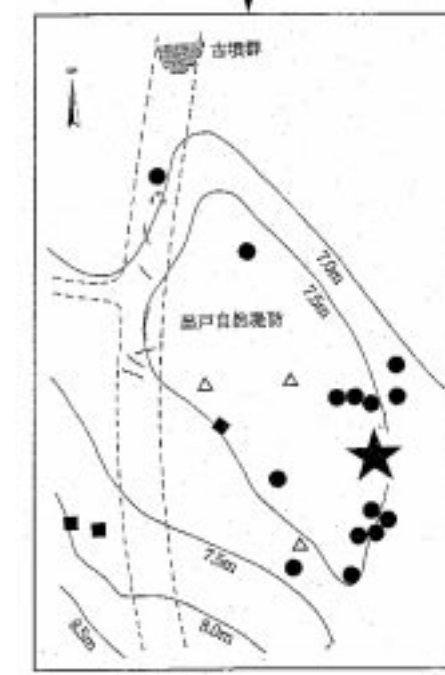


図3 調査地周辺における土地利用の変遷

大阪市文化財協会2002『長原遺跡発掘調査報告』より

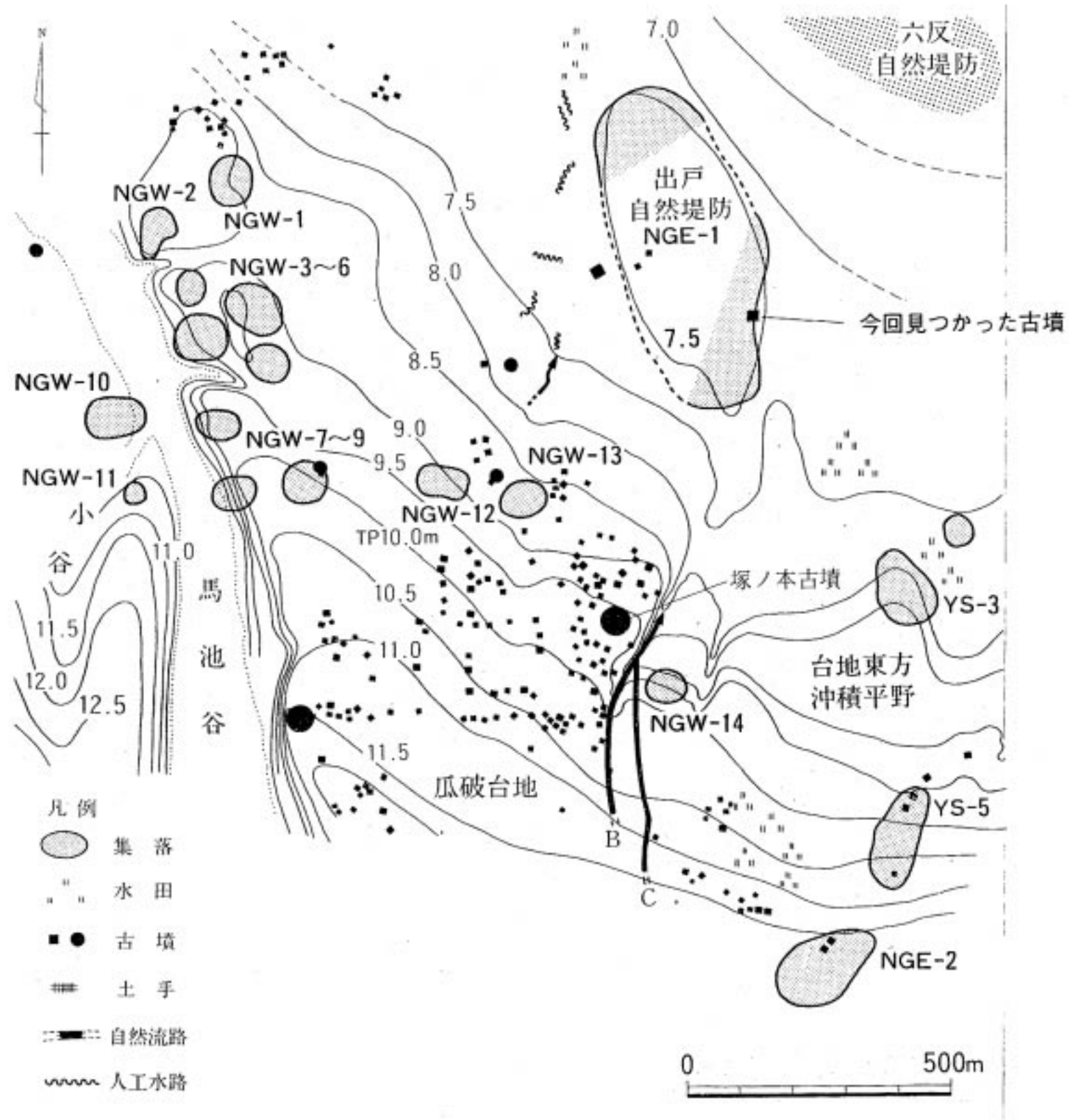


図4 古墳群・集落の分布
 大阪市文化財協会1999『長原遺跡東部地区発掘調査報告』より

	40m以上	15m以上	7m以上	7m未満	規模不明
4世紀後半～末 須恵器出現前	● (塚ノ本) ● (一ヶ塚) 85	● 170 (高廻り2) ■ 169 (高廻り1)	□ 213 今回見つかった古墳	■ 196	40 176
5世紀前半～後半 TK 73 TK 208 型式		■ 57	■ 8 9 10 11 15 26 ■ 31 44 45 47 50 51 ■ 53 61 62 79 102 103 ■ 105 109 110 129 132 134 ■ 139 147 150 181 173 179 ■ 180 183 199	■ 18 28 30 ■ 49 83 114 ■ 137 141 167 ■ 172	29 59 65 67 71 73 74 77 80 81 100 108 112 115 149 152 166
5世紀末～6世紀初頭 TK 23 TK 47 型式		■ 116 ■ 190	■ 3 5 7 13 27 32 ■ 34 52 54 58 63 64 ■ 86 87 89 94 106 111 ■ 113 131 142 143 162 187 ■ 188	■ 6 33 35 ■ 36 60 135 ■ 145 200	2 4 37 38 82 84 107 140 193
6世紀前半～中頃 MT 15 TK 10 型式		● 130 (七ノ坪) ● 181 (南口)	■ 153		

図5 長原古墳群の変遷(数字は古墳番号)
 大阪市文化財協会1993『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』より



図6 粘土槨の例
 (奈良県下池山古墳)
 橿原考古学研究所ほか1996
 『第13回 公開講演会資料』より